

2023年7月9日 礼拝説教要旨

ハイデルベルク信仰問答講解Ⅱ 5 「完全な償い」

詩編49：8～9、ヘブライ7：23～25

本日の問12から信仰問答は第二部に入ります。この第二部では「人間の救い」が語られます。それは「どうすればあらゆる罪と悲惨から救われるか」ということです。神さまの至高の尊厳を傷つけたゆえに、神さまの怒りをかい、永遠の刑罰を体と魂に要求されているわたしたちは一体どうすればいいのでしょうか。

問12 わたしたちが神の正しい裁きによって、この世と永遠との刑罰に値するのであれば、この刑罰を逃れ再び恵みにあずかるにはどうすればよいのですか。

答 神は、御自身の義が満たされることを望んでおられます。ですから、わたしたちはそれに対して、自分自身によってか他のものによって、完全な償いをしなければなりません。

ここに「償い」とあります。英語ではpayですが、具体的な支払い、賠償をイメージする言葉です。神さまの尊厳を傷つけ、そのかたちを壊したのですから、それに対してわたしたちは償いをする必要があります。少し前でしたが、回転寿司で悪ふざけをした少年に対してお店は何千万円もの損害賠償を請求した話がありました。面白半分、軽い気持ちでしたことがとんでもないことになってしまう。でも実際にお店が受けた損失はもっと大きかったのだと思います。わたしたちも軽い気持ちで罪を考えているかもしれません。でも神さまの尊厳を傷つけた罪は重く、その代償は大きいのです。そうでなければ神さまの義が満たされない。では神さまの要求を満たすような償いとはどういうものなのか。わたしがそれを支払えるのでしょうか。

問13 しかし、わたしたちは自分自身で償いをすることができますか。

答 決してできません。それどころかわたしたちは日毎にその負債を増し加えています。

問14 それでは、単なる被造物である何かはわたしたちのために償えるのですか。

答 いいえ、できません。なぜなら、第一に、神は人間が犯した罪の罰を他の被造物に加えるようとはなさらないからです。第二に、単なる被造物では、罪に対する神の永遠の怒りの重荷に耐え、かつ他のものをそこから救うことなどできないからです。

わたしたちがこの罪の償いをすることはできないと言います。それどころか日毎にその負債を増し加えている。人間は日々罪を重ねておりますから、賠償金を支払うどころか、毎日負債が増えていってしまう。とてもわかりやすい答えです。今日読んだ詩編では「神に対して、人は兄弟をも贖いえない。神に身代金を払うことはできない。魂を贖う値は高く、とこしえに払い終えることはない」（49：8～9）とありました。

では自分が無理なら他の誰か、他のものがこれを代わることができるのでしょうか。それもできないと言います。問14で「第一に、神は人間が犯した罪の罰を他の被造物に加えるようとはなさらない」人間はその罪の責任を自分で負わなければならない。他のものがその代わりはできないということです。これも当然のことでしょう。自分のしたことですから責任は自分にある。

「他の被造物」とありますが、ここでは旧約の犠牲祭儀を思い浮かべることができます。旧約の民は毎日おびたしい犠牲の動物を贖いの供え物として神殿の祭壇に献げました。祭司は来る日も来る日も祭壇で動物を屠り続けます。これは相当大変な作業だったと思います。毎日、犠牲を捧げ続けなければならないのは、人間が日々罪を犯し日毎にその負債を増し加えているからに他なりません。ですから「単なる被造物では、罪に対する神の永遠の怒りの重荷に耐え、かつ他のものをそこから救うことなどできない」のです。被造物は常に不十分ですから創造者

である神さまの怒りをなだめることはできない。完全な償いにはならないということです。

信仰問答の背景には、明らかに宗教改革があります。例えば、当時の教会は「聖人」と呼ばれる人の功德にあずかることで罪の負債が免除されるという教えを説きました。免罪符が売られて教会が莫大な富を得ていたのです。お金を払えば罪が赦される、神さまの義が満たされるなら、こんなに都合のよい話はない。人々は喜んで免罪符を買いました。でもそれはキリストの救い、十字架の贖いを見失わせる大きな過ちです。人間はどんなに優れていても、神さまの御前には一人の罪人であり、その罪を償うことはできないのです。

では本当にどうしたらよいのでしょうか。信仰問答は問15でその答えを提示します。

問15 それでは、わたしたちはどのような仲保者また救い主を求めるべきなのでしょう。

答 まことの、ただしい人間であると同時に、あらゆる被造物にまさって力ある方、すなわち、まことの神でもあられるお方です。

ここに「仲保者」の存在が示されます。これは教会特有の用語です。世間で言えば「仲介者」「仲裁者」ということでしょうか。これは両者の言い分を聞いて取り次ぐこと、調停することです。しかし人間の罪は一方的にわたしたちが悪いのですから、神さまと折り合いをつけるような話ではありません。とにかく神さまに赦していただかなければならない。それを詫びて、「どうかわたしに免じて赦してあげてください」と執り成し、和解を取り付ける役割が必要です。しかも一時的ではなく、そういう不完全なものではなく、未来永劫、完全に神さまとの仲を保ってくださいる存在です。

そういう存在があるのでしょうか。それが「まことの、ただしい人間であると同時に、あらゆる被造物にまさって力ある方、すなわち、まことの神でもあられるお方」とあります。まことの人間として罪の責任を担うことができる方であると同時に、まことの神さまとしてこの罪の重荷に耐え、かつそこから救い出すことができる存在。それがイエス・キリストです。このキリストこそ、まことの仲保者として、完全な償いを果たしてくださいるお方です。誰もこれに代わることはできません。キリストによってのみ神の義は満たされます。ヘブライ人への手紙に「この方は常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、御自分を通して神に近づく人たちを、完全に救うことがおできになります」(7:25) そのような完全な償いを神さまご自身が備えてくださいました。わたしたちが自分で用意するものではありません。神さまが用意してくださいました。それは恵みとしか言いようのないことです。

天の父よ。あなたに対して取り返しのつかない過ちを犯しました。自分の力ではそれを償うことはできません。だからこそ、あなたは独り子を与えて、わたしたちに代わって罪の償いをしてくださいます。そのようにあなたがすべてを備えてくださった恵みに感謝して、その救いすべてを委ねることができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。